かささぎ 通信 第60号

2017年 9月 8日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます　森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

「森三郎の作品を読む会」は、二〇一七年七月十四日（金）から『赤い鳥』に掲載された森三郎作品を読み返すことにしました。

七月は、森三郎の『赤い鳥』掲載第一作目の「赤穴宗右衛門兄弟」から始め、次の五作を読みました。

①「赤穴宗右衛門兄弟」茅原順三　昭和６年３月号
②「人形しばゐ」茅原順三　昭和６年５月号
③「おばあさんと鬼」茅原順三　昭和６年７月号
④「赤いポスト」須川よし子　昭和６年９月号
⑤「ゐぐひ太郎」茅原順三　昭和６年９月号

①の「赤穴宗右衛門兄弟」は、ラフカディオ・ハーンのOf a Promise Kept　を兄銑三と友人萩原恭平が翻訳した「約束を守る」を子ども向けに書き直したものだということは、刈谷市教育委員会編『森三郎童話選集　かささぎ物語』の酒井晶代氏の解説によってよく知られるところです。刈谷市郷土文化研究会・郷土研究誌『かりや』第３８号の「森銑三・森三郎兄弟と刈谷」で筆者も「約束を守る」と「赤穴宗右衛門兄弟」の表現の比較を通して、森三郎の再話の意図を考えてみました。

最近では木田　悟史氏が、『赤い鳥』のラフカディオ・ハーン：茅原順三(森三郎)「赤穴宗右衛門兄弟」を通して（Philologia (48) / 三重大学英語研究会 編 ）という論文の中で、ハーンのローマ字表記の日本語表現について、再話の仕方を論じている文章も目にしています。

木田氏は森三郎の「赤穴宗右衛門兄弟」について、酒井晶代氏の『かささぎ物語』解説を引用しつつ、怪奇趣味が抑えられ、兄弟愛のテーマが明確になったと特徴を上げています。

来年二〇一八年の『赤い鳥』創刊百年の記念の年を前に、森三郎の作品が刈谷市以外でも注目されていたことは、ちょっとうれしく思います。

③の「おばあさんと鬼」もラフカディオ・ハーンのThe Old Woman Who Lost Her Dumpling　(Japanese Fairy Tale)（明治３５年）を再話したものだということは分かっています。

④の「赤いポスト」は「かささぎ通信」第５９号でお知らせしたように、ローズ・ファイルマンの作品の再話でした。

また、④の「ゐぐひ太郎」は、狂言「居杭」を元にしたものだと言うことも「かささぎ通信」第６号で紹介してきました。

森三郎は「私の記者時代」（『赤い鳥代表作集５　付録一九八八年）の中で、「昔の話を五、六編も書いて、私はやっと創作が出来るようになった。」と書いています。そうなると、②の「人形しばゐ」にも再話の元になる話があるのではないかと気にかかっていました。

ところが『日本人の笑』（森銑三・柴田宵曲・池田孝次郎　共著、一九四二年初出）を読んでいるうちに「化された人形遣」というタイトルがあることに気づきました。これは江戸時代中ごろの文人、建部綾足（たけべあやたり）の『折々草』という随筆の中にある話で、読んでみると、これこそまさに「人形しばゐ」の話でした。このことについては森三郎の作品を読む会会誌『かささぎ』第３号（本年十二月発行予定）で詳しく述べるつもりです。

次回「森三郎の作品を読む会」（第二金曜日に刈谷市中央図書館で開催）
１０月１３日（金）午後１時半～３時半

①**森三郎「城下町」**（『季刊　新児童文化』昭和２１年８月）続き
②森三郎「鐘」（『赤い鳥』昭和６年１０月号）
森銑三「鐘のたましひ」（『帝国民』大正９年４月号）
③森銑三「九月二十六日　小泉八雲」（『偉人暦』大正１３年）
森銑三「小泉八雲」（『赤い鳥』昭和２年６月号）